



六感まで使って食べる！ 守りたい地域の食と伝統



細渕 直代さん

特定非営利活動法人大杉谷自然学校

文：垂水 恵美子（JEEF 職員）

三重県大台町。高齢化と人口減少が進む山間の地域にあるのが、大杉谷自然学校です。大杉谷地域に住んでいる人たちから学ぶこと、伝統を暮らしから伝えることを大切に自然学校の活動には、周辺の地域、県外からも子どもたちがやってきました。

大杉谷に特別なものはないのかもしれない、と細渕さんは語りま
す。とはいえ春なら山菜、夏は鮎、秋は鹿肉、冬は栃餅：非日常感とシンプルな素材の味は、子どもたちの記憶に強く残ります。山の香り、川の音、大杉谷の空気を吸いながら食べる食事。雰囲気を含めた五感、心の動きも含めたら六感を使って食べる美味しさ！家庭だと食材に触れる機会も少ないかもしれませんが、大杉谷自然学校では素材と過程を大切にしています。調理のために火を起こし、苦労してから食べると「いただきます」と「ごちそうさま」の感じ方が変わる気づくことに、自然学校は期待しています。

大杉谷には今も透き通る水の流れる美しい宮川があります。しかし、ダムができる前の宮川で子ども時代に遊んだ70代80代の地域の人たちは、もつと綺麗で豊かだったと語ります。海と川を魚が行き来し、魚の数も魚種も今より豊富でした。そして魚は買うものではなく川で捕るものでした。だから川から食べものを得ていた人たちは、川を身近でとても大切に感じています。

だからこそ変化にも敏感で、災害時にいち早く異変に気づいて、過去の災害でも難を逃れたことがあります。「食べることは生きること」。自然から食べるものを得ることは、大切な力を養ってくれるのです。
大杉谷自然学校は活動を始めて20年が過ぎました。その当時感じた「この地域はいつか無くなるのかもしれない」が今、目の前にあり、人の暮らす地域が山に還ってゆく過程に今いるのだと細渕さんは感じています。自然学校と一緒に発足した大杉谷せせらぎ会は、自然学



校の食事を地元料理でずっと支えてくれている地域のお母さんたちのグループですが、一番若くて77歳。伝統の危機を迎えています。冷蔵庫のない時代を支えた保存食の技術や自給自足の暮らしから生まれた食文化は、社会の変化や高齢化により失われようとしています。

自然学校では、地域に残されていた人にも自然にも優しい循環型社会の形を次世代に伝えることが何より大切だと思っています。自分たちが学んだり、記録に残したりと残して伝える努力を惜しみません。
空気、宮川、美しい自然の景色とそこで暮らす地域の人。そんな魅力がいつばいの大杉谷に足を運んで、まるごと全身で感じてみてください。